

2010 年 8 月 22 日（日）「地球の形成期」

創世記 1 章 6 ～19 節

6 神は仰せられた。「大空が水の真ただ中にあれ。水と水との間に区別があれ。」7 神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。そのようになった。8 神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があつた。第二日。

9 神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」そのようになった。10 神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。11 神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。12 地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。神はそれを見て良しとされた。13 夕があり、朝があつた。第三日。

14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあつて、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。15 また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。19 夕があり、朝があつた。第四日。

【序論】 創造の記事の順序の問題

創世記に描かれている神の天地創造は六日間かけて行なわれています。18 世紀頃までは、この「六日」を文字通り「24 時間×6＝144 時間」と捉え、神が極めて短い期間内に創造の御業を完成させられたという考え方が一般的でした。今でもそのように考える人は少なくありませんが、19 世紀頃から科学の発達とともに、宇宙の起源、地球の起源の年代が高い蓋然性をもって仮定されるようになり、それらが途方もない時間をかけて形成されてきたことが分かってきました（宇宙：137.2±1.2 億年／地球：45.58 億年）。それに伴い、聖書に描かれている創造の記事を文字通りに捉えることに疑問が抱かれ始めたのです。そして、様々な解釈が試みられ、科学的な発見と

聖書の記事を調和させようとする努力がなされてきました。大まかに分けると三つの代表的な解釈が浮かび上がってきます。

(1) **断絶説**（創世記 1:1 と 1:3 との間に断絶があるとする）

数十億年前に原初の完全な創造があったが、その後、地球に大激変が起こって荒れ果て、数千年前に神がもう一度六日間かけて地球を創造し直したと考える

(2) **長期間説**（日一時代説）

「一日」を非常に長い時代、あるいは、漠然とした長期間と捉える

(3) **枠組説**（論理的順序説）

創造の記事は、年代的な順序というよりもむしろ、類似した事柄の配列によって、論理的に構成されていると考える

これらの説は、各々更に多くの解釈に分かれています。その中のどれを取っても長所と難所がありますので、これと断定することはできません。これらの中から最も問題が少ない解釈はどれだろうかと考え抜いた末、この創世記からの説教は「枠組説」の立場に立って話を進めていくことにしました。

【本論】

今日の記事を読んでいて、疑問に思われた部分があったのではないのでしょうか。それは、第二日目の「大空の創造」、第三日目の「地と海、植物の生成」の後に、第四日目の「天体の創造」が置かれていることです。宇宙発展の順序で言えば、太陽系が成立した時に地球はできていますので、太陽、月、星が後でできたとは考えにくい。しかし、それで聖書に記されていることが誤りであると単純に裁定することはできません。なぜなら、創造の記事は現代科学に基づく知識や言語によって表現されているのではなく、書かれた当時の人々の世界観に基づいて記されているからです。また、創造の六日は「時間的な順序」というよりもむしろ「論理的な順序」によって構成されていると思われる。聖書の中で何らか「歴史の流れ」に関する記事が出てくるときは、多くの場合、正確な年代を示すことよりも、その歴史の意味を伝えることに重点が置かれているのです（例えば、人間の系図には全員の名前が挙げられていないことが多く、物語の順序も時間的に前後しながら進んでいく）。この「枠組説」の立場に立って天地創造の六日を分析すると、次のようになります。

形成の日々		充足の日々	
第一日	光・闇	第四日	日・月・星
第二日	大空・水の分離	第五日	鳥・魚
第三日	乾いた地・植物	第六日	動物・人間

本論 1．創造の第二日：大空の創造による、上下の水の分離

では、第二日目の内容から見てまいりましょう。

神は仰せられた。「大空が水の真ただ中にあれ。水と水との間に区別があれ。」神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。そのようになった。神は大空を天と名づけられた。(1:6-8a)

第一日目には荒れ狂う大水が出てきました（やみが大水の上にあり）。第二日目にはその水が整えられます。「大空の下の水」とは、地上に海らしきものができたこと、「大空の上の水」とは、天に雲ができ、地に雨を降らせる環境ができたことを言い表しているのでしょう。生物にとって不可欠なのは水です。動物は川から水を飲み、植物は雨によって育つ。このように、生物が生きていくための環境が整えられようとしているのです。おそらく、できたばかりの地球はまだ相当な熱を帯び、水蒸気で覆われていたことでしょう。一寸先も見えず、息もできない状態だったかもしれません。しかし、そこに「大空」が広がることによって呼吸ができるようになり、視界も開けます。

第二日目が終わるに当たって注目すべきことは、「大空」が創造されたというのに、神はそれについて「良し」という評価を下しておられないことです。それはおそらく、未だ生命を維持していくための環境ができ上がっていなかったからでしょう。地球の環境はまだまだ整えられなくてはならないのです。

本論 2．創造の第三日：地と海の形成、植物の生成

次に、第三日目の内容。ここでは、いよいよ海の中に地が現れ始めます。

神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」そのようになった。神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。(1:9-10)

「天の下の水が一所に集まれ」とは、海や川や湖などの水資源ができたことを意味します。神はここでようやく「良し」とされる。生物が生きていくための土壌が整ったからです。そこに登場してくるのが植物群です。

神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。(1:11)

「植物」の中にも「種を生じる草」と「その中に種がある実を結ぶ果樹」という二種類があります。どちらも種があることが重要視されている。それは、子孫を残していくためです。このようにして創られた草花と果実の生る木々は、後に人間を含むあらゆる動物を養うようになります。

地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。(1:12)

ここで大切なのは「種類にしたがって」という表現です。この「種類別」に関する具体的な内容は、後のイスラエル史における祭儀律法の規定の箇所に登場します。例えば、申命記14章の、イスラエルの民が食べて良いものと食べてはならないものとが区別されている箇所。そこでは、ひづめが割れていて、かつ反芻する動物（牛、羊、やぎ、鹿など）は食べてもよいとされていますが、そのいずれかの条件を満たしていない動物（らくだ、野うさぎ、岩だぬき、豚など）は食べてはならないと言われる。これは、神が種類別に創造されたものを何者も混同させてはならないということを象徴しているのです（つまり、イスラエル民族を他民族から区別するための象徴）。

これについては次回扱う予定でありますが、種類別に創造されるところに各種類の独自性があり、その秩序を侵すことはできない。このことは、人間が他の動物と区別され、神の御前に特別な存在であることと深く関わっています。

本論 3. 創造の第四日：天体の創造と役割の付与

次に、第四日目の創造の内容。ここでは天体が登場します。

神は仰せられた。「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。(1:14-15)

もちろん、ここで初めて宇宙ができたということではありません。地に創られた植物

を養う存在として太陽と月が取り上げられたのです。私たちは当たり前のように昼と夜の交替のサイクルの中を生きていますが、ここに生物に対する神の愛と配慮があることに気づかされませんか。昼は働き、夜は休むことができる環境が与えられている。

「しるし」とは、日の長さや月の満ち欠けを見ることによって、天文気象の予測ができるようにという神の取り計らいを指すでしょう。昨年（2009年）7月22日に起きた皆既日食のときには、昼間なのに動物が眠り、蟬が泣き止みました。人間だけでなく、動植物までもが、この「しるし」を知っていることに驚かされたものです。

「季節のため、日のため、年のため」とは、太陽と月の動きを通して、人間が年中行事を定めたり、カレンダーを作ったり、いつ種蒔きをし、刈り入れをしたら良いかが分かるようになるということ。これもよくよく考えると、私たちの一年の歩みにおいて不可欠だということに気づかされます。いつ何をすれば良いかが分からなければ、人間は計画的に食を得ることができません。動物は本能でそのサイクルを知っているようです。しかし、人間は与えられた知恵により、1年を365日と定め、一定のサイクルの内を生きています。このことは、神が天体を通して与えてくださった「しるし」に基づいているのです。

神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。神はそれらを天の大空に置き、地上を照らせ、また昼と夜をつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。

(1:16-18a)

太陽と月に、昼と夜をそれぞれに「つかさどる」という役割が与えられています。私たちがいつも目にしているこれらの天体もまた、神の御心を実現すべく奉仕をしているということになる。もちろん、人類をはじめとする地球上のあらゆる生命の営みを守るためです。創られたすべてのものによって、私たちの生活が支えられている。

ところで、ここには一度も「太陽」「月」という表現が出てきていないのが気になります。創世記の著者は、意図的に「太陽」「月」という表現を用いることを避けているようなのです。それは、創世記が書かれた当時、多くの異教文化がイスラエルを取り巻いていて、これらの天体が神格化されていたからだと思われます。「星」に関しては僅かしか出てこない。星もまた異教文化において重要な「占いの手段」とされていたからでしょう。ですから、ここでの天体の描き方は、他宗教において「神」と崇められているものを「神に創られたもの」（被造物）へと捉え直している点において、重

要な独自性があります。また、この捉え方は、すべての被造物の存在意義と人類への神の特別な寵愛とを明らかにしています。人類が創造の御業の最後に登場するところに、万物が人類の祝福のために備えられたことが表わされているのです。

【結論】

人間とは自分の存在意義を問う生き物です。自分は何のために生まれてきたのか。それは、聖書の啓示によって明らかにされました。人間がどれほどの特権を受け、「地の管理者」としての使命を帯びている存在であるかを知ることによって、人間の生き方は積極的なものとなるでしょう。私たちのために大宇宙を創造し、その測り知れない秩序を保っておられる神を知る。この神の目的に従い、神がお創りになったすべてのものを愛し管理することが、人類に与えられた使命だと聖書は第一に呈示しているのです。

【祈り】

天地万物を整え、人類に与えてくださった神よ。この被造物の秩序は、「地の管理者」として立てられた、ほかならぬ人類によって崩されてきました。しかし、あなたは今も尚この地上に恵みを注ぎ続けておられます。私たちに、あなたが造られたすべてのものを愛する心を与え、感謝と使命とに満ち溢れた人生を歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人類を愛するが故に、すべての天体を創り、生きる環境を整え給うた、父なる神の愛、
被造物の管理にあぐねる人類を贖い、良き管理者へと造り変え給う、主イエス・キリストの恵み、
己が創造主と出會わせ、生きる目的に目を開かせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。